

建築展におけるホワイトキューブ・ミュージアムを超える展示方法についての研究 ～宝塚市立文化芸術センター「宮本佳明展」をめぐる～

早稲田大学理工学術院 教授 宮本佳明



建築家磯崎新は、第一世代美術館を王侯貴族の私的コレクションを公開したもの、第二世代美術館を「ホワイトキューブ」と呼ばれるニュートラルな展示空間で構成される近代市民のため美術館と定義付けた。その上で、自らが設計したサイト・スペシフィックな展示を特長とする奈義現代美術館（1994）を第三世代美術館の嚆矢と位置付けたが、その後サイト・スペシフィック・ミュージアムが一般化することはなかった。今やアートが市民生活に深く溶け込む一方で、形式化した従来型のホワイトキューブ・ミュージアムに対して人々が抱く一定の疑念や陳腐さについては奈義以降も宙吊りにされたままである。

本研究は、ホワイトキューブ・ミュージアムを乗り越える新しい美術館の可能性を、展示方法の側面から探求することを目的としている。特に建築展については、アートの展覧会とは異なり、建築実物を展示することは不可能である。図面、模型、写真といった副次的マテリアルを駆使して、ホワイトキューブという限られた空間の中で建築の実像を伝えることに注力せざるを得ず、二重の意味においてホワイトキューブを克服する展示形態を模索することが重要である。

宝塚市立文化芸術センターにおいて開催された宮本の個展「入るかな？はみ出ちゃった。～宮本佳明 建築団地 Full Size is oversized : KATSUHIRO MIYAMOTO Architecture Park」（会期：2023年9月16日～10月22日）を主要な研究題材として取り上げた。本展覧会では、複数の原寸大建築模型を製作し、それらがレリーフのように壁や床の至るところから飛び出しているという展示構成を試みた。実際に製作した原寸模型は建築物の一部分に過ぎないものの、鑑賞者の想像力を借りることによって、壁や床の向こう側に建築空間の全体像を浮かび上がらせることが出来るのではないかという目論みである。

宮本展以外にも、2023年は美術界・建築界において、美術館あるいは展示という形式に対して強い批評性を持った展覧会が多く開催された年となった。アーティスト梅田哲也によるワタリウム美術館での個展「wait this is my favorite part 待つてここ好きなとこなんだ」、建築家西澤哲夫によるギャラリー・間での個展「偶然は用意のあるところに」、現代アートチーム目[mé]のディレクションによるさいたま国際芸術祭2023等である。これらの事例はいずれも、ホワイトキューブ・ミュージアムを乗り越える新しい可能性に満ち溢れている。磯崎新の唱えた美術館の世代論を超えて、むしろ展覧会の側が進化することにより美術と建築の地平に新たな時代が到来する予兆を感じずにはおれない。



「入るかな？はみ出ちゃった。～宮本佳明 建築団地」展